

佐野 令而*

Reiji SANO*

朝永振一郎先生は文章の達人でもあった。随筆集「庭にくる鳥」(みすず書房1976年)は傑作だと言われている。

本の名前になった随筆はこうである：

武蔵野にある先生の庭には、冬になるといろいろな鳥がやってくる。

庭に作ったえさ台に、毎日りんごを半分置いてやる。鳥達はよろこんでこれを啄む。

当然のことながら、えさ台の周囲にふんを残す。ふんの中には、植物の種子が入っている。

先生は丹念にこれを集め、4月頃に鉢に蒔いてやると、梅雨時に芽が出て、葉となって、

秋には何の植物かはっきり同定できるようになる。

今までに、ツタ・アオキ・ネズミモチ…など9種類の植物の名前が分かった。

こうした内容が、無駄のないやさしい語り口で書かれていて、読者は思わず引き込まれる。

そして最後に、先生は自然観察の達人であったと悟るのである。

庭に来る鳥の観察でも、大物理学者は凡人とは違うのである。

私の庭にも、初冬になると、ひよどりやってくる。

朝、旧式の木製雨戸をガラガラと開けると、庭の梅の木にひよどりがとまっていて、その音に驚いて「ピヨヨ」と鋭く鳴きながら、一寸離れたところに飛び移って私の行動を観察しているか、これを機に何処かへ飛んで行ってしまふ。

私は、気分のよい朝は、みかんを何個か輪切りにして、梅の木の隣のゆずの木の小枝に刺しておく。翌日にはこれらのみかんの実はきれいに食べられているから、鳥たちは、私が会社に行っている間に、家人が一人であることを見越して、ゆっくりと食べているのであろう。

私はこうして気まぐれではあったが、私の家は安全であること、偶には食べ物にもありつけること、を鳥たちに教えて来たつもりである。

ところで、私の家の前の道路は、かなりの急な坂道になっている。

ある日、私は近くの私鉄の駅前に所用があって、この坂道を下り始めた。

その時二羽のひよどりが大変な勢いで、下のほうからこの坂道を上ってくる。

私は瞬間、このまま行けば鳥たちと私は正面衝突するかもしれないと思った。

そして、(当たり前だが)鳥たちの方で私にぶつかりそうになる手前で身をかわした。

私が振り向いて行くえを追うと、彼らは道路沿いに飛行を続け、それからほぼ直角に右折して、私の家の庭に入って行ったのである。

ただそれだけのことであったが、私は彼らの行動に、大いに満足したのであった。

(後記)

私が学生の頃、年の瀬に、物理学科の学生(と先生)が酒を呑んで騒ぐ恒例の「ニュートン祭」に、朝永先生がお越し下さった。1959年のことではなかったか。

その時先生は、落語を語ってくれた。先生は語りの達人でもあった。実物の先生におめにかかったのは、それきりである。

* 松下電器産業株式会社 (〒 570-8501 大阪府守口市八雲中町 3-1-1)

* Matsushita Electric Industrial Co., Ltd., 3-1-1 Yagumo-Nakamachi, Moriguchi, Osaka 570-8501